
運命が変わるまであらがい続ける

scan

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

運命が変わるまであらい続ける

【Nコード】

N9702V

【作者名】

scan

【あらすじ】

能力。それは誰もが持つことの出来る力。能力は時に代価の法則や物理の法則などの法則を無視することが出来る。

五十嵐蒼空は強大な力を持ちながら悲しき過去と決められた運命のレールの上を歩いていた。蒼空はそんな運命が変わるまで戦い歩き続ける。

日常

日差しがマンション五階に位置する部屋の窓から差し込み、眠っている体を起こす。

四月十日、この日は学生達にとってテンションが上がる者もいれば下がる者もいる。なんと言っても学校が始まる日なのだ。

「学校かあゝ。行きたくないな」

誰もいない部屋でポツリと呟く。変わることはない日常がまた始まるのだ。

部屋から出てキッチンに向かい朝食の準備を始める。コンロに火をつけ、フライパンに油を少し注いで温まるのを待ちベーコンの表を焼きその上に卵を割って乗せる。焼けるまで弱火にしてその間に野菜を切ったり、パンをオーブンにかけたりしていた。目玉焼きが完成すると皿に乗せて完成する。朝は目玉焼きとサラダ、パンという定番の食事をしている。食べ終わると皿を洗い片付ける。

制服に着替えて荷物をまとめて学校に行く準備をして、学校に向かう。途中ですれ違う奴らに「また来てるよ」、「恥ずかしくないのか」、「何で来るんだよ」などのひどい言われようだった。まあ当たり前だ。なんせ、この五十嵐蒼空は能力がないのだ。無いとは言ったものの実際はある。が、使わなかったため周りからは無いと認識されている。何故使わないのかは内緒だ。

学校の前まで来てため息を吐く。いつ見てもデカイ。白光高等学校。それが俺の通う学校なのである。能力の測定や開発、制御の仕方などを主に学んでいる。能力がない奴でも入学して使えるようになる者もいる。ちなみに、能力を専門とする学校は全国に七十三、工業系・農業系は合わせて百五、普通高は二百三十二となっている。どの学校でも能力については学ぶ。

門をくぐり教室に向かう。

「蒼空ー待てよ」

後ろから妙にテンションの高い声が聞こえてきた。

「蒼空久しぶり」

「楓太いいことでもあったのか？」

声を掛けて来たのは秋雨楓太。俺の少ない友達の一になる。

「いいことならさつきかわいい子見つけたぐらいかな」

「お前の脳みそはそればっかだな」

「蒼空もつとテンション上げろよ」

「お前が高すぎなだけだろ」

こいつはいつでもどこでもテンションがやたらと高い。でも、楽しい事には変わりはない。

楓太と教室に入ると教室中の視線がこっちに集まった。いつもの事だがなかなか馴れない。専門学校であるこの学校に来ているにも関わらず能力が使えないのだから。

視線を無視して窓側の一番後ろにある自分の席に着く。楓太はその前に座った。それと同時に一人の若い男性が入ってきた。

「みんな席に着け。」

入ってきた男性は背が高く世間で言われている美男イケメンの分類に入る。

「みんないるか？居るならいいぞ」

周りを見渡して言う。

「えーこのクラスの担任になった坂本俊之サカモト トシユキだ。よろしく」

（坂本俊之？・・・どこかで聞いた事がある。気のせいかな）

「俺は教師としては新任だから一人ずつ自己紹介をしてもらう。名前と能力を言え。じゃーまず廊下側からな」

廊下側って普通グラウンド側からだろ。誰もがそう心の中で突っ込んだ。

廊下側からだから蒼空は最後になる。徐々に終わり楓太の番が来た。
「秋雨楓太。能力は風です。よろしくお願いします。」

楓太がいい終わり席に着くと教室中の鋭い視線がこちらに集まる。
坂本は何の事か分からずに居た。

「五十嵐蒼空。能力は無いです。」

それだけ言って席に座った。

「また居るよ」

ノファース
「無能力のくせに」

「帰れよ」

いろいろな声が聞こえてきた。それを遮るように坂本が話し始める。

「まあ、自己紹介も終わったみたいだから次に能力の測定を行う。」

測定は自分の能力に合った所に行け。終わったら各自帰っていいぞ」

坂本が言い終わると生徒は教室から出て行った。

「楓太！俺屋上に居るから終わったら来てくれ」

「はいよ。なるべく早く終わらせてくるよ」

楓太は教室を出て行った。

風系統の能力は運動場でやるから屋上からなら観る事が出来る。蒼

空も出て行こうとした。

ノファース
「無能力はこれから何やるもかな」

「おいおい！あまり言っていると泣くぞ」

「おもしろ」

後ろから蒼空を馬鹿にするような声が聞こえてきた。森信司とその仲間である。森信司、有名な会社の社長息子。すべての事に関して上から目線の嫌な奴だ。

それをシカとして教室出て屋上に向かう。その後もな何か言っていたようだが聞こえなかった。屋上に行くとするでに一人居た。

「蒼空やっぱり来たんかい？」

「悪いか？そう言うお前は測定に行かなくていいのか？」

「俺は能力とか言われる物はあまり好きじゃないねん」

そう言ったのは城田智久。シロタ トモヒサ

「それお前が言えるか？」

「さあーて何の話だ」

トラッキング ヘル
「危険ランクSの地獄の追尾」

危険ランクは国際条約によって決められている能力とその使用者の危険度を表している。地獄の追尾トラッキング ヘルそれが智久の能力。その手から放

たれた物は対象物に当たるまで止まる事はない。

「まあー別にいいけど」

「そう言う蒼空はまだ隠すつもりか？その力」

「そうだぞ！早く言っちゃえば世界が変わるのに」

「わっ！！！」

突然後ろから声がして驚いた。当たり前のことだ。ここは4階建ての屋上でフェンスにもたれている。その後ろは空中になるのだ。

「そんなに驚くなよ」

「いやいや普通驚くだろ」

後ろから現れたのは楓太だった。風の力を使いここまで上がって来た。楓太は学校でも有数の能力使いなのだ。

「それはそうと使わないのか」

「使わないよ。そう決めたから」

「それならいいけど・・・」

ドンッ

屋上のドアが勢いよく開いた。そこに居た三人共開いたドアの方を見た。

「またここにいる」

「なんだよ？」

「あなた達がまたサボってるからでしょ」

屋上に来たのは髪はセミロングで身長は165ぐらいの少女で合った。松島百合。それが彼女の名前である。蒼空とは小学校からの付き合いらしい。

「俺は今測定して来たからサボってはなないぞ」

楓太が必死にサボりを否定していた。

「終わったなら帰ろうよ」

「それもそうだな。昼食をどっかで済ませて帰ろう」

「それいいね。蒼空と智久も行くよね？」

俺たちは軽く頷いた。

百合と楓太は楽しみなのかさっさと階段を下りていく。俺たちはそ

の後を着いて行く。

「百合には力のこと言ってるのか？」

不意に智久が聞いて来る。

「言ってるない。あいつは何も知らなくていいんだ」

「蒼空がそう言うならいいけど何かあってからは遅いから」

「分かってる。お前は大丈夫なのか」

「今のところは大人しくしてるから大丈夫だろ」

危険ランクSの智久は何かとめんどくさい事に巻き込まれるらしい。

「おい二人共早く」

下で待っている二人が待ちくたびれたらしい。

「行くか」

「そうだな」

下の階へ駆け下りた。その後は近くのファミレスに入った。お腹が空いていたのかみんなすごい勢いで食べていく。会計は蒼空が払うことになってしまった。その後は買い物などをして帰った。

みんな帰り道はほとんど一緒だから昔の話や今日の能力測定の話などをしていった。この時は楽しかった。そんな日常が続くと思っていた。

「蒼空どうした？急に止まって」

「いやなんでもない。なんか見られてるような気がする」

「何？妄想？」

「蒼空もそんなのにはまってるんか？」

「そんな訳無いだろ」

「本当か？」

「さー帰るぞ」

そのまま気にすることもなく帰った。

ある廃棄されたビルで電話を掛けている女性が居た。

『気づいた素振りを見せましたが気づかれてないようです』

「絶対に気づかれないでね」

『分かってます。目標は城田智久ですね』

「そうよ。頼んだわ」

女はそういい残して電話を切った。

「待つてなさい。創造と破壊の力を持つものよ」
クリエイト デストラク

女は不適な笑みを浮かべ高笑いした。

悪夢（ナイトメア）の序曲

始業式から数日が経ちテストなどがあつたが授業が始まり徐々に落ち着いて来た。

相変わらず俺へのクラスからの対応は酷いものだ。それでも楓太や智久、百合は俺と仲良くしてくれている。そういえば、最近睨まれる時に嫉妬と殺気を感じる事がある。何でも百合のファン倶楽部が出来たらしい。

ある日の夕方、何もない俺は一人で家に帰っていた。他の三人はというと楓太は「女の子見つけてくる」と言つて他のクラスの二人と夕焼けの街へ消え、智久は「用事がある」と何処かに行き、百合は「先生に呼ばれた」という理由で俺は一人で帰っている。

「夕焼けが綺麗なのに暇だな」
ポツリと一人ごとを呟く。

陽が沈みかけている中で蒼空を見る男達がいた。その腰には拳銃がある。

蒼空は大通りからマンションに繋がる裏道に入った。この道はあまり使われていなく人氣が少ない。道の幅も1.5メートルぐらいしかない。近道としては一部の人から使われている。

蒼空が裏道に入ると男たちも動き出す。男たちは三人組でそれぞれ所定の位置に移動する。蒼空は自分が見られていることも知らず鼻歌を歌いながら呑気に歩いて帰宅している。裏道を25メートルほど進み右に曲がった。それと同時に男たちも動き出す。

「さっきからつけて来てるみたいだけど何か用？」

蒼空は後ろから男達が尾行していることを知っていた。

「へえ、気づいてたのか」

「何が目的だ。俺は金なんか持ってないぞ」

「いやいや。金じゃないんだ」

男はフードを被っていて素顔が見えない。

「君の実力が見たくてね」

「俺は能力なんか持ってなぞ」

「それはどうかな？」

男は手のひらに風は集め始めた。

「少しだけ遊ぼうか？」

そういうところちに向けて風を起こす。その勢いは強くはないが前に進むのに邪魔になる。

「風使いか」

蒼空は右にかわす。が幅が狭くうまく避けることが出来ない。風が止むと男は前に手を出し刃のような風を起こす。

「鎌鼬」

蒼空の左が何かによって切られる。

「うっ」

風は見えない分こちらが不利になる。一旦逃げよう。

後ろを振り向き走りだす。なるべく攻撃が当たらない程度に蛇行しながら逃げる。

「逃げてちゃ。面白くないぞ」

男は声を張り上げて言う。その場からは動こうとしない。

（追ってこない。何故だ？）

蒼空の疑問はすぐに答えが出る。目の前に別の男たちが現れたのだ。それは蒼空にも予想だになかったことだ。

（先回りされていたのか。くそ！）

「君逃げるのはなしでしょ」

「あれゝ聞いてない？俺たち一人じゃないよ」

状況は三対一に変わった。勝つには難しい状況になった。

「もう諦めたら？」

一人が針のような物を四、五本投げる。それを右に体を傾け避ける。避けきれたと思っていたが足に刺さった。

「ぐっあつ。・・・追尾能力者か」

「君頭いいね。そうだよ。俺の能力は追尾さ。まあ分かった所で避

けることは出来ないけどな」

また、先ほどの男は針を投げる。蒼空は走る。射程圏内から逃げるために。射程圏内は能力を使う事の出来る範囲を表す。射程圏内から出ようとしたとき前から突風が吹きつけた。先ほどの男が追いついて来たのだ。

「遅いですよ」

「気にするな石井。それよりこいつか先だ」

「仕留めてもいいんですか？」

「勝手にしろ」

石井と呼ばれる男は再び針を取り出して投げる。今度は四・五本ではない。十本ぐらいはあるだろうか。これを食らえば確実に死ぬ。そう思った蒼空は背中の方から拳銃を取り出し、飛んでくる針に目掛けて引き金を引いた。銃弾は全部で五発放たれた。その内三発が飛んでくる針に、残り二発が石井とその隣にいた男の足に当たった。
「がっ……うっ。……くそ餓鬼が」

「……………」

石井はバランスを崩し地面に倒れる。隣に居た男はしゃがみ込んだだけで声すら上げない。

「最近の餓鬼はそんな物騒な物持ってるのか？」

「こんな物持つ俺ぐらいだろう。……俺には能力とか言われる便利な物は持ってないからな」

銃はいつも持っている。銃刀法違反にならないのかと言われればそれまでだが能力を持たない物は武器を持たなければ戦えないのが現実である。

「本当にそうか？」

「何が言ーてんだ」

銃を構えて警戒する。相手は風の能力者。見えない攻撃に備える。

「そんなに警戒するなって。今日はもう何もしねーよ」

男は自分の周りに風を起こしそれに乗りどこかに行こうとした。

「じゃーな少年。また会おう」

どこかに消えて行った。

後ろに二人居ることを思い出し振り返る。だが、そこには誰も居なかった。

「もう一人はテレポーターか。・・・何しに来たんだ」

誰も居なくなつた場所で尋ねる。答えなど返つて来るはずもなかった。

たまに街の不良たちに絡まれる事がある。もちろん能力者だ。その時は金目的やストレス発散という迷惑なものだが今回は違った。確実に俺を狙つて計画されたものだ。それにリーダー的な男は何か知っていた。

「何も起きなければいいがな」

蒼空もその場所から立ち去り自宅に向かった。その頃には陽は落ちていた。

廃病となつた病院の研究室の椅子に座る女性と円になっている机に数人座っていた。

『排除に失敗しました』

「やはりあの程度では勝てないということね」

『ですが、相手側も数名重軽傷者がでした』

「でも、地獄の追尾は倒れてないでしょ？」

『はい。怪我ひとつしていません』

「分かつたわ。後始末お願いね」

『かしこまりました』

電話を切りポケットにしまう。

「さあこれからどうする？」

研究室にいる数人に話しかける。

「問題はないだろう。計画に狂いはない」

薄暗く顔は見えないが声からして老人のようだ。

「そうね。この計画は誰にも止めることはできないでしょね」

「今までどつりに計画に沿って行けばいいね」

「ならこれで会議は終わりだな。私はやることがあるから先に失礼する」

そう言い残して身長2メートルはあるゴツイ男は出て行った。

「全く真面目なやつだ。俺も帰るぞ」

集まっている中では一番若い青年が出て行った。それに続きみんな出て行く。

部屋に残ったのは電話をしていた女性だけだった。

「・・・・・・・・・・」

机に置いてある写真を見つめていた。2、3分すると写真を伏せて部屋から出て行く。写真には幼い子供達が写っていた。子供の顔は未来に希望を持つ笑顔でいっぱいだった。そこに子供達を知る者もなくその過去を知る者も居なかった。

無能力の実力

翌日、時間ぎりぎりに起きてしまった。

昨日の事で疲れ深い眠るについて目覚まし時計の音に気づかなかったのだ。意味の分からない三人組みに襲われたのだ。怪我をした部分は知り合いに治癒能力を使う奴がいて、そいつに治してもらった。と言っても痛みはまだ少し残っている。治癒能力を使える者は一握りだと言われている。

時間がないため準備を済ませてすぐに家を出た。朝食を作っていると遅刻してしまうのだ。遅刻ぐらいならいいと思うがそうはいく訳にはいかない。俺は能力が使えない。そのため、能力の単位がないに等しい。そのため、遅刻、欠席はあまりしたくないのだ。ちなみに能力についての学力は誰にも負けない。能力を補うためでもあるが襲われた時の対処法などが必要なのだ。

走る。とにかく走る。時間がない。運がないのがこの時間はバスがない。待っていても20分後にしか来ない。学園までは、10分ぐらいにで着く。だから走る。この時、レポートの能力が欲しいと思った。

全力で走ると5分ぐらいで学校に着いた。そのままの勢いで教室に飛び込んだ。その時、みんなの視線を浴びたのは言うまでもないだろう。

「五十嵐遅いぞ」

「すいません。寝坊しました」

「明日からは気をつけろ」

「はい」

結局、遅刻してしまった。全力疾走が無駄になった。

「蒼空ドンマイ」

「ああ少しぐらい許してもいいと思うよな」

「仕方ないな。それがこの学校の規則だから」

遅刻したとは言え朝のH.Lはまだ始まったばかりである。

「五十嵐か秋雨どちらか城田の事知らないか？」

「いや知りません」

「僕もです」

智久が来ていない。珍しいなあいつはよっぽどの事がない限り学校には来る。って事は何かトラブルでもあったのか？まさか昨日の事に関係してるのか？蒼空が来ていないことに疑問を抱いていた。

「お前らに忠告しとく事がある。昨日、銃による発砲事件と能力者同士の争いがあったみたいだ。二つの事には関係性はないが十分に気をつける。とくに発砲事件は誰も目撃者が居ないからいつ起こるかわからない。街中で無闇に能力を使ったりするんじゃないぞ」

銃による発砲事件と聞いたとき蒼空はギクツとした。まさか昨日の事が問題になっていとは思わなかったからだ。

「それと言いつつ忘れてたけど今日は能力を使ったトーナメントみたいなのをやるから覚悟しとけ。これは、能力に対する防衛術を身に付けてもらうからな。じゃ終了」

坂本は話をするだけして教室を出て行った。

「蒼空ドンマイ。不幸が続くな」

「なんでこんなことやるんだ？力のない奴の事考えろよ」

「それもそうだけど、蒼空ならいけるだろ？一応武器も持ってるし」

「その事なんだけど銃が使えないんだ」

「えゝなんで？」

楓太は驚いた。蒼空の武器の要になるはずの銃が使えないことに。銃がないとなると大分きつくなる。

「昨日の発砲事件・・・俺なんだ」

「はあゝ。何が遭った？」

「変な奴らに絡まれてな仕方なく」

「それでか。確かに怪しまれるな」

「そうだよな」

落ち込む。大事な武器が使えないから。

「でも、大丈夫だろ。クラスの半分ぐらいはお前が持つてるのぐらい知ってるし、学園だつて認めてるんだから」

「本当に大丈夫か？」

「大丈夫だつて。それよりも智久が来てないのはおかしいな？」

「確かに。何かあったのか？」

「まあ気にしても仕方ないからグラウンドに行くか？」

「そつだな」

クラスのほとんど居なく俺達と2、3人いる程度だつた。急いで行つてみると授業はすでに始まつていた。

「お前ら遅いぞ！次は五十嵐だから準備しろ」

クラスの半分程度は終わつていて各自、自主練みたいのをやっていった。

「蒼空がんばれ。本気でやれよ」

「相手次第かな・・・と言つても無能力じゃ高が知れてるけどね」

「嘔吐くな。力隠してても戦えるくせに」

「何のことだよ？」

「五十嵐早く来い」

楓太と長く話して先生に呼ばれてしまった。

走つてグラウンドの真ん中に行つた。先生は「待ちくたびれた」と言わんばかりに重たい腰を上げて、説明を始める。

「能力は使つていいが人は殺すなよ。怪我しても保健の佐藤先生がいるから思いつきりやれ」

グラウンドの隅にある木の下に手を振っている人が居た。佐藤先生は治癒能力を使う事の出来る先生。治癒系の能力は人数が比較的小さい。

「五十嵐。お前、能力ないよな？大丈夫か？」

「一応何とかなると思います。こつというのは馴れてますから」

「そうか。でも、気をつけろよ」

「はい」

白線で囲まれてる中に入る。白線で囲まれている面積は50、5

0の2500平方メートルぐらいはある。なかなか広い。

「君が相手に良かったよ。思いつきり楽しめそうだ」

「……だから何だ？」

「余裕だね。まあそうして居られるのも今のうちだ」

相手は森の仲間？みたいなやつだ。加藤とか言う奴だったような。森と居るせいかこいつも上から目線になっている。

「じゃ勝手に始めてくれ。危険と感じたら俺が止めるから」

適当な教師だな。よくそんなんで教師やれてんな。

「じゃ始めようか？いじめになるけど」

加藤の手には水が集まり始める。

「簡単には死なないでね」

手に集めた水を銃のように飛ばしてくる。

左に避け小刀を取り出し距離を縮める。小刀は戦うには近距離戦に有効だ。一気に距離を縮めて、小刀を下から上に振り上げる。しかしギリギリのところで避けられる。

「君って以外に素早いね」

「黙れ！」

「荒々しくて怖いね」

「うるせー」

小刀を逆に持ち走り出す。

「どんなに突っ込んで来ても無駄だよ」

そう言うとか藤は手に水を溜めて行く。その水の塊は次第に大きさを増し5秒経つ間もなく直径1メートルまで膨らんだ。

「これくらい耐えてね」

水の塊を蒼空に飛ばす。塊が当たった蒼空は後ろに飛ばされる。バウンドを繰り返して5メートル後ろで止まる。

「ゲホッゲホッ……ハアハア」

「まだ生きてたね」

「当たり前だ……馬鹿が」

（加藤ってこんなに強いのか？これは出し惜しみなんて出来ないな）

背中に手を回して力強く握る。

「これで終わりにするね」

加藤の周りに無数の水の玉が浮く。それが合図と共に一斉に飛んで行く。

水の玉は蒼空に当たる前に飛び散る。

蒼空の手には拳銃が握られている。それで飛んでくる玉を壊しているのだ。拳銃は一丁ではない両手に持つ二丁で壊していく。

「簡単に死んでたまるか」

攻防一戦を繰り返していく。蒼空の銃の弾がなくなり応戦できなくなるか加藤の体力がなくなるかのどちらかひとつ。見ている者は蒼空が負けると予想した。いや見ていなくてもそう思うのが普通だろう。

無能力の者が能力を持つ者に勝てるはずがない。それがこの世界の常識なのだ。

「君、しぶといんだよ。早く負けなよ」

「お前こそ早く倒れる」

（こいつやっぱり強いな。どうなるのか分からないけどあれをやるか）

周りを見渡すと蒼空と加藤の周りには大きな水溜りが出来ている。

（これなら出来る）

蒼空は一丁で加藤の足を狙って発砲する。もうひとつで水を打ち落とす。そして走り出す。

「突進してきても何も変わらないよ」

加藤は水を棒状に打ち出す。

「これで終わりだ」

（今だ）

ポケットからスタンガンを取り出す。それを棒状の水の中にスタンガンを持った手をつ込む。

「君は馬鹿だね」

「消えろ」

スタンガンのスイッチを入れる。そのとたん棒状の水と周りにある水に電気が走る。それは目に見えることなく加藤を襲う。

「うぁーがあーああああー」

加藤は悲鳴を上げる。断絶の叫びをあげる。そのうち悲鳴は聞こえなくなり地面に倒れた。が、電撃を浴びたのは何も加藤だけではスタンガンを使った蒼空も同じだ。蒼空は悲鳴を上げることもなく地面に倒れる。

「五十嵐何をやってるんだ？」

「す・・・いま・・・せん」

そこで意識は途切れる。その後何があったかは分からない。

目が覚めるとそこは見慣れた真つ白な天井が広がっていた。

「うつ・・・痛っ」

「おっ！ やつと目が覚めたか」

「ここ保健室だよな」

「ああ」

何故ここが保健室だと分かったかというところと今まで何度もここに来たことがあるからなのだ。無能力者にとっては誰もがここに一度は来る。

「蒼空は無茶しすいだぞ。まさかスタンガンを水に突っ込むなんて死ぬ気か？」

「ああでもない」と勝てなかったからな」

「勝った？ あれが？ 二人共倒れといて」

「それは言っな。俺らが倒れた後どうなったんだ」

俺らが倒れたいろいろと遭ったらしい。加藤が病院送りになったり、水が校舎に届いていてスタンガンのせいで学校中が停電になったりとやばかったらしい。他にもいろいろと話してくれた。

「今何時だ？」

話に夢中になっていて今が何時なのかが分からない。

「今は12時半ぐらいだぞ」

「……12時半！そんなに寝てたのか？」

12時半。それは俺が倒れてから3時間は経っている。たかが3時間と思う者や授業をサボれてラッキーと思う者が居るだろう。だが、俺にとつてはその3時間は大事なのだ。ただし、時間ではなくて大事なのは授業の方だ。何故、授業だ？と思うだろう。俺にとつては授業は大事なのだ。特に能力についての授業は、どんな能力がどれだけ存在するかを覚えるための希少な時間なのだ。ちなみにインターネットや図書館では国の許可が下りないと見ることが出来ない。

「それがどうした？」

「能力の授業が？」

「それならノートにまとめたから貸してやるよ」
そう言つて鞆からノートを取り出した。

「サンキュー。それと智久来たか？」

「あいつは来てないぞ」

「そうか。……この後の授業は何？」

「今日はもう終わりだぞ」

えっ！

「明日は国際能力専門学校、明後日は国際能力開発研究所の見学だから」

なんだそれ？聞いてないぞ。

「一週間前に言つてたけど聞いてないのか？」

「さっぱりと」

「話ぐらいい聞けよ。まったく。まあ兎に角、明日は八時半に学校集合だから」

「分かった。何かいるか？」

「たぶんいない。……じゃ俺帰るな」

楓太は保健室から出つて行つた。

「毎年だけど研究所には行きたくないな」

誰にだつてひとつはあるだろう。知られたくない過去、嫌で忘れ

ようと心に封じた過去が。前に進むために、欲望をかなえるために犠牲にしてきた過去や人たちが存在するだろう。

研究所は周りから見れば功績が高く、有能な科学者の集まりかも知れない。俺にとつては忌々しい所なんだ。

あれからどのくらい経っただろう。真っ白な天井は淡く夕焼けの色に染まっていた。

「そろそろ帰るか」

近くにある鞆を手に取り保健室を跡にした。

見学

翌日、二年生は学校のグラウンドに集まっていた。

「皆さん、今日は国際能力専門学校、明日は国際能力開発研究所に行きます。どちらも我が国が世界に誇る施設です。今日と明日は能力についての研究を学び、楽しんで来てください」

朝から長い校長の話が終わった。何をやるにもこの時間が一番きつい。

順番にバスに乗り込んで行く。俺は三組のため三号車に乗ることになっている。バスに乗ると隣には楓太が座った。

「今日は楽しみだな」

「どこがだよ？」

「今日も智久来ないのかな？」

智久は今日も来ないのか。連絡ぐらいしろよな。

「あいつに何も無いといいけどな」

智久は十五歳という若さで危険ランクSに指定された。あいつの能力が危ない訳ではない。同じような能力者はたくさんいる。何故危険視されているのかというと才能にある。智久は稀をみる天才である。学力、運動はもちろん能力の使い方までもがずば抜けていた。そして、その力は世界でもトップクラスの物になった。それを恐れた国際能力機関は智久を危険ランクSに指定して行動を制限した。いくつかの条件を守ることによって普通の生活を送っている。

「後から来ると思うぞ」

「それならいいけどね」

三組全員が乗り終わるとバスは目的地に向けて出発した。

これから向かう場所は東京の真ん中にある国際能力専門学校になる。世界からも注目されていて強力な能力者や珍しい能力者もいる。それに力をつける環境も整っている。選ばれし者しか入れないエリート学校だ。

国際能力専門学校はここから40分ぐらい離れた所にある。高速を使い行く。バスの中は小学生のように騒ぎ笑っていた。

でも、俺は寝ていた。俺を仲間に入れてくれる心の広い奴は数人しかない。それも、能力がないせいである。

バスは白光高校の三倍はあるであろう建物の門を通過した。外見はホテルのように綺麗で御坊ちゃま、お嬢様の別荘のような豪華な造りになっている。

「別次元にでも来た様だ」

「同感。金使いすぎでしょ」

「金持ちは違うね」

バスを降りて体育館に向かう。体育館もすごいかと思つたら、普通より1.5〜2倍ぐらいの大きさで逆に驚いた。

前に一人の少女が立つ。

「皆さんこんにちば。私は国際能力専門学校生徒会長、黒田美咲くろだみさきといます」

少女は髪が長く、十人は居れば十人が振り向くくらいの美少女だ。

「今日は遠い所からよく来られました。この学校の施設を思う存分見て、体験してください」

生徒会長黒田美咲の話が終わり前からいなくなると周りから声が聞こえてきた。それはどれも共通して同じような言葉が二つ聞こえてくる。「かわいいー」そして「フラッシュバイロット閃光操縦者」。

“閃光操縦者”という名は政府が与えた二つ名になる。

この日本には超越者と呼ばれる人間が十二人いる。超越者とは一定の能力値を超えた者をいう。その力は絶大な能力を発揮する。

簡単に言えば日本でトップ十二に入る者達だ。

「どこから回る？」

見学は基本何処でも見ていい事になっている。

「何処でもいいよ」

「なら、図書室に行こう」

突如、後ろから少女の声が聞こえる。

まあ後ろを見なくても予想は大体ついている。名は松島百合。

「なんで図書室なんだ？」

普通は授業や施設の見学がほとんどだ。図書室に行く奴など聞いた事がない。

「だって、普通じゃ見れない資料が見えるんだよ」

有名な学校、施設は普通よりも能力者に関する資料を見ることが出来る。

それには納得できる。

「行くところないし行くか？」

「それもそうだな」

「やったー」

三人は体育館を出ようとするが出れない。一度に出る量が多すぎて渋滞が起きている。

この暑い中の状態はやめて欲しい。

それから出たのは30分経ってからだった。

「図書室ってどこだ？」

楓太が疲れたような声を出して尋ねる。

「次の角を左に百メートル進んで右に行つた所」

「本当に合ってるのか？さっきからいろんな場所行ってるけど」

「百合って、方向音痴だもんな」

「違うよ。地図が読めないだけだよ」

百合は自慢げに否定をする。

だが、否定になっていない。

「お前な、それはそれで方向音痴よりタチが悪いぞ」

「ほら、着いたよ」

体育館を出て一時間。普通なら20分で着く所に図書館は存在する。

百合の方向音痴に振り回されたのだ。と、言っても20分も掛かる広さだ。仕方ないかも知れない。

扉を開けると薄暗く窓から太陽の光が入っている状態だった。

「暗いな」

「本の数が尋常じゃないな」

「ここからは自由ね。自分が見たい本を勝手に見てて」
そう言い残すと置くへ行った。

「じゃ俺はあつちで暇をつぶしをしてくる」

「ああ。俺も適当にやってるよ」

楓太と分かれた後、近くに在った『電磁力による能力の発現』という本を手にとって、座る場所を探した。

どのくらいの時間が経っただろう。

傾いていた太陽は真上に、気温が上がりシャツが少し濡れている。

「もう十二時か。腹減った」

本を机に投げると外を見た。

グラウンドで能力を使う者達がいた。

「お祭りみたいだな。・・・派手だ」

「あれはイベントの一環だが、君はここに居ていいのか」

「わっ!!」

突如、後ろから声が聞こえる。

「そんなに驚くか？」

「えっと・・・あなたは・・・そう、生徒会長、フラッシュパイロット閃光操縦者」

「その呼び方はやめろ」

後ろに現れたのは生徒会長黒田美咲。またの名をフラッシュパイロット閃光操縦者。

「それは置いといて。イベントの一環とはどういう事ですか？」

「置くのはやめろ。まあそれはそうと・・・体育館に入るとき腕時計のような物を渡られたよな」

腕に付いている物を見る。ここに来る前、正確には体育館に着いた時、腕時計に似た物を渡された。

「これがどうしたんですか？」

「それはつけている者の状態を感知する機械だ。今、グラウンドだけじゃ校舎内でもサバイバルが始まっている」

「サバイバル？」

サバイバルって何だ。俗に言うバトルロワイヤルか。

「どうせ上が考えた事だろう。君達の学校生徒を相手にここの生徒が戦うというものだ」

「そんなの勝ち目あるわけないだろ」

蒼空たちが今居る国際能力専門学校は日本ではもちろん世界でもトップクラスに当たる。そんな学校に普通の専門学校生徒がまともに戦えるはずがない。

「その通だ。君はどうする？」

「俺は無能力者だからここで隠れてる」
ノブアース

「それは無理だな。ここに居ればペナルティが課せられる」

「ただ計算してやってんだよ。」

「なら戦うか？蒼空」

「当たり前だろ。と言ってお前がだけどな楓太」

本棚に身を任せるように楓太が立っていた。

「私もやるよ」

本棚の間から百合が出てきた。

「そうだな。なら俺が指揮官しよう」

「蒼空指揮官の元、出勤だ」

そのままの勢いで図書室から出て行った。

「なんだか・・・楽しそうだな」

生徒会長がボソツと言った一言は蒼空達に聞こえる事はなかった。

サバイバルまたの名をバトルロワイヤルは予想以上に厳しかった。同じ学校の奴らはほとんどがやられていた。後がない状態だった。

そして、今も交戦中だった。

「お前らみたいな弱小はさっさとやられている」

三人向かって水の塊が飛んでくる。それも、複数の方向からだ。
「渦巻き」

楓太の起こした風は水の塊を飲み込み、水の竜巻を相手に向けて飛ばす。でも、全てを巻き込めた訳ではない。

「こっちは任せて」

百合は飛んでくる水を目の前で止める。

サイコキネシス

【念力】手を触れずに物を動かす事が出来る。自分の努力しだいではビルさえも動かす事が出来る。

それが彼女の能力だ。

「そちらにお返しします」

空中で止まっている水が飛んできた方向に戻る。

水の竜巻と水の塊が相手生徒にあたり、体が後方に飛ばされる。

「終わったな」

「当たり前よ」

後ろを向き蒼空の元に歩み寄る。

「甘いぜ」

突然、液体が飛んでくる。

「やべっ」

風を起こそうとするが間に合わない。

バンツバン

銃声が廊下中に響き渡る。

銃弾は飛んでくる液体を拡散させる。拡散した液体は壁や床に当たると溶かし蒸発する。

「酸か。危ないな」

「お前ら気を抜くなよ」

「わりー」

液体の蒸発が終わり、蒸気が消えると眼鏡を掛けた青年が立っていた。

「生きてたんだ。下等生物のくせに」

蒼空は無言のまま拳銃を構える。

「能力のない奴はそんなので戦うんだ」

「黙れ。今すぐに此処を立ち去れ」

「誰に命令してるんだい？立ち去るのは君達だよ。大して能力も無いくせに」

「黙れ。それ以上喋るならば容赦しないぞ」

標準を青年に合わせる。

「黙るのはそつちだろ」

笑う青年に三発の銃弾が迫る。距離にして10メートル。常人には見えない速さで突き進む。

「そんな物が僕に届く訳ないだろ」

青年の前に酸で作られた壁が現れる。銃弾は壁に当たると蒸発してなくなる。

「鎌鼬」

酸の壁は風の刃により崩れ、青年は後ろに吹き飛ばされる。壊れた壁の酸が当たりに飛び散る。蒼空たちの方へ飛んできた酸は百合の能力で止める。

「ここじゃ、風を使う巻き沿いを喰らうぞ」

「どうする？」

床に酸が広がる。

とつさに後ろに跳び回避する。

「よくもやってくれたね。知らないよ」

「.....」

青年は体中から大量の酸を放出する。それは周りにある物を溶かしていく。

「跡形もなく消えろ」

大量の酸が津波のように襲い掛かる。

「二人共下がって」

百合は前に出ると両手を突き出して能力を発動する。

迫っていた津波は時間が止まったかのように動かなくなる。

「私が時間を稼ぐからどうにかして」

「わかった。無理はするな」

百合はそこまで強い力は持っていない。津波を止めておける時間

は約5分。それ以上は難しい。

「あれを使うか」

「それだけはやめておけ。学校ごと壊す気か」

楓太が使用としていた事はサイクロンを起こそうとしていた。室内でサイクロンなんかを起こせば、学校ごと吹き飛んでしまう。

「じゃどうするんだよ」

「俺に考えがある。お前の鎌鼬で床に穴を開けてくれ。そして、俺が防火装置を銃で打ち抜く。そしたら、勝手に水が出てきて薄めてくれるだろう」

運がいい事に此処は2階になる。だから、酸の津波を楓太の開けた穴に流し込むという作戦だ。

楓太が穴を開け、防火装置目掛けて発砲しようとした時、少女が現れた。

「君達これはいったどういうことですか？」

現れたのは生徒会長黒田美咲。

「どういう事って言われても、あなた達がイベントの一環でしているサバイバルでしょ」

「そう言う事ではない。あそこに居るのは誰かと聞いている」

「あれは、ここの生徒じゃないんですか？」

「ここの生徒に酸を操る生徒は居ない」

生徒会長の言葉を聴いて驚く。「酸を操る生徒はいない」と言う言葉を聞いて。

「じゃあれは………侵入者」

侵入者

その場に居た三人は固まった。

この学校は厳重な警備システムが引かれている。そこに誰にも見つからずに侵入出来る訳がない。況してや一人で入ってくる馬鹿はいない。

「蒼空。私もう限界だよ」

固まっている間に百合が限界を迎えた。

「もう少し待ってくれ。今助けに行くから」

蒼空は助走をつけて穴を越えようとした。だが、腕を掴まれた。

「待ちなさい。あなたが行けば巻き沿いを喰らうわ」

「でも、百合が限界なんだ」

「私が行くわ。私はあなた達も知つての通り【光を操る力】なの。光の力を使えば助けれる」

黒田の周りには眩しく輝く光が体を包んでいく。

「私があの子を助けたら、あなた達に投げる。そしたら、後ろに逃げなさい」

光が全身を包んだ黒田は地面を蹴り、光に近いスピードで到達する。百合の体を抱えて、蒼空たち目掛けて投げる。

「後ろに下がって」

蒼空は百合を受け取り走り出す。黒田も光のスピードで動き出す。酸の津波は百合の能力が解けた事により、ダムのが降った川のようにまた迫り動き出す。

「ここまじや追いつかれるぞ」

「くそっ」

迫り来る津波は蒼空達の真後ろまで来ていた。距離にして2メートル。

「急げ！早く来るんだ。」

酸は楓太が空けた穴に流れる。だが、全てが流れて無くなる訳で

ない。入りきらなかった酸は周りを溶かしながら蒼空達に迫る。

「楓太、百合を頼む」

蒼空は楓太に抱えていた百合を渡す。

「何をする気だ」

「俺があれを止める」

「でもどうやって」

「能力を使う。それしか、方法がない」

「……」

楓太は黙り込んでしまう。

「気にするな。守るために使うんだ」

そう言っただ蒼空は立ち止まり津波のほうを見る。

「何をしている。死ぬ気か？」

後ろから黒田の声がする。でも、気にすることは無い

「能力使うの何年ぶりだ。まあ、久しぶりだから上手く制御してくれよ」

周りに聞こえるか聞こえないかの小さな声で呟くと前に片手を突き出す。

「想像しろ。津波を止める壁を」

そうしている間にも津波は蒼空に迫っていた。後ろからは生徒会

長黒田の声と能力による光が見えていた。

「想像した物を現実に。^{クリエイト}創造」

言葉を発すると共に、差し出した手の前に廊下いっばいに広がる、鉄の壁が形成された。

津波は壁に当たると止まりながらも壁を溶かそうとする。

「久しぶりだけど、上手く出来たな」

振り返り楓太達の下に歩み寄る。

「お前、能力使うの遅いんだよ」

「仕方無いだろ。でも、助かったからいいじゃねーか」

「それもそうだな。あの壁どのくらい持つ？」

指を指して尋ねる。

「そうだな……一日は持つだろう」

一日は持つという事は壁の厚さが大分あるということだろう。

「どうする？あの壁壊して、向こうに居る奴でも倒すか？……それとも逃げるか」

「あとで面倒になるのは嫌だから倒すか」

「そうだな」

壁の近くに行くと手を差し出す。

「消えろ」

廊下中に広がっていた鉄の壁が塵のように消えていく。

廊下は所々窪みができ、酸で溶かされた物の異臭と霧が漂っていた。

「臭いな」

「ものすごくな。風で外に出してくれよ」

「はいよ」

楓太の手からは風が起こる。異臭と霧は風に乗りに逃げ去り、霧の晴れた場所には、酸を操る眼鏡を掛けた青年が立っていた。

笑みを浮かべ。

「君達よく生き残れたね。褒めてあげるよ」

自分が上の地位に居るように話してくる。

「黙れ。よくもやってくれたな」

楓太は手から突風を起こす。だが簡単に避けられてしまう。さすが、蹴りを入れる。だが、お腹に当たる寸前で蹴りを止めた。

「いい判断だよ。止めてなかったら足がなくなっていたよ」

青年は自分の体に酸を纏っていた。

楓太がそのまま蹴りを入れていたら、楓太の足は無くなっていただろう。

「楓太避ける」

声と共に風に乗る、青年から離れる。それと同時に銃声が鳴り響く。

「危ねー」

銃弾は楓太の目の前をすれすれで通過し、酸を纏った青年に突っ込む。青年は避ける気配を見せず、ただ突っ立っているだけだった。銃弾は、瞬く間に青年に到達する。

「だから、俺には銃弾は無意味だって言ってるの分らないかな？」

銃弾が酸の鎧に当たると先の方から蒸発して消えていく。

「やっぱり効かないか」

「どうする？」

酸の鎧を纏われると銃弾はおろか打撃を与えることも出来ない。

ましてや、ここは室内であるゆえに無闇に風を起こせば、何が起るかわからない。

「あなた達、下がっていて。ここは私が対処します」

俺たちを指して置いて前に出たのは、生徒会長黒田美咲。

「何だよいきなり出てきて？」

「そんな事はどうでもいい。侵入者は私、フラッシュパイロット閃光操縦者の権限を使い

排除します」

ここに来て、超越者としての権限を施行する。

超越者は国にいろんな面で協力するという条件である程度の権限を持っている。国には協力するとは、簡単に言えば戦争だったり、指名手配犯の逮捕への協力などがある。

「勝手にしやがれ」

楓太と蒼空は黒田よりも後ろに下がる。

「侵入者に警告します。ただちに、ここを立ち去るのならば、拘束はしません。抵抗するのであれば、そのときは命の保障は出来ません」

黒田は酸を纏う青年に、最初で最後の警告をした。

「誰にものを言っている」

青年は完全に否定する。相手が超越者と知ってなお、上からもの言う。そして、手を上から振り下ろす。手についていた酸が飛んでくる。黒田はそれを簡単に避ける。

「従う気はないと言う事ね。なら、手加減なし」

黒田の指先から光のビームが放たれる。そのスピードは、銃弾よりも遙か上に行く。ビームは瞬く間に青年にたどり着き、右肩を貫く。反応さえ出来ず、右肩を抑え声を出すことも地面に膝を着く。

「これで降参する気になった？」

黒田は問いかける。

「・・・くっ！・・・この程度で僕に勝ったつもりか？」

肩から血を流しながら立つ。

「降参する気ないと言うことか。状況が分からない馬鹿のようだな」「馬鹿？誰に言ってるんだ。たかが、超越者だからっていい気になって調子に乗らないで欲しいな」

酸の塊を銃弾のように飛ばす。速くはない酸の塊だが、体の一部に当たれば、そこを限りなく溶かしていく。だから、安易に近づくことが出来ない。

黒田もまた指に光を集め、レーザービームのように飛ばす。

二人の差は圧倒的なものだった。飛んでくる酸を避けながらも、ビームを撃ち続ける。一方、酸を操る青年はいくつ物酸を次から次へと生産し、飛ばし続ける。だが、ビームを避けることは出来ず、横腹と足の付け根を貫いた。各所から血が飛び出し、周りには血の海が広がる。

「・・・すこい」

「これが超越者の力か・・・」

蒼空、楓太は目の前で見た光景に唖然としていた。

言葉を失うほどに。

酸を操る青年に三人掛かりで挑んだ蒼空たち。三人という数でのハンディーキャップがあつたにも関わらず、勝つことはおろか攻撃さえも出来ず、自分の身を守ることが精一杯だった。決して、楓太や百合が弱いわけではない。楓太は学校でもトップクラスの実力を持ち、百合も学校では目立たないが能力の使い方は誰にも引けをとらない。そして、能力を使うのに抵抗があつた蒼空は、仲間のために使った。それでも、勝てなかった。

ただ、青年が強いただけだった。

その青年を軽々と負かし、勝ったのは目の前にいる少女だった。名は黒田美咲。国際能力専門学校の生徒会長であり、日本にいる十二人の超越者の一人。

「何故だ？何故、僕がこんな事に」

「これで分かったでしょ？あなたじゃ、私には勝てない」

黒田は迷い無く言い切る。

「もう時期に警察が来る。大人しく罪を償いなさい」

「……僕は……戻らないと……あの方の元に」

青年はわけの分からない事を言い出した。

「……こんな所に居てはいけない」

壁を伝いながら必死に立とうとする。足から流れる血はまた噴出して、周りに拡散する。

「何をするつもり？それ以上、抵抗するならあなた死ぬわよ」

黒田の忠告を無視して立ち上がる。

「……僕が、君達見たいな下等生物に負けるわけがない。……こんな姿になるとは……覚えていろ」

「待ちなさい」

青年を捕まえようとしたが、体中から酸の霧を噴射し視界を遮る。霧は一気に廊下中に広がる。三人は後ろに避ける。すかさず、楓太が風を起こし、霧を退かす。

「君達には、此処で僕と死んでもらう」

そう言う青年の体には大量の爆弾が巻きつけられていた。

蒼空や楓太はおるか黒田まで動けなくなった。

今此処で、大量の爆弾が爆発すれば、学校にいる生徒、先生、メディア関係者などを含む八百以上の人の命が犠牲になってしまう。それだけは、どんな手段を使っても避けなければいけない。例え、青年を殺しても。

「どうした？さっきまでの威勢は」

「落ち着きなさい。爆破したらあなたも死ぬわよ」

「それがどうした。あの方のために死ねるなら幸せだ」
青年の言葉に死ぬことへの迷いを感じさせなかった。

「あの方？」

青年が先ほどから口にしている『あの方』という言葉に蒼空は引っかかる。

「どうした？早く捕まえてみなよ。ほら」

片手に起爆スイッチを握り、挑発する。

「ひとつ聞いていいか？」

挑発してくる中、蒼空が尋ねる。

「別に構わないが、すぐに君達も死ぬんだから意味無いけどね」

「そうか・・・お前がさつきから口にしている『あの方』と言うのは誰のことだ？」

「あの方は、選ばれし者だよ。誰よりも美しく、みんなを導く女神のような人だ。君達みたいな下等生物が会える訳が無いだろ」

『あの方』と言う人物は女神と詠われて、人を操っている。

負けるということに恐れていた青年は『あの方』という言葉は発し、その事について聞くと活き活きと話し、『あの方』のためなら死ぬことさえも恐れなくなった。

「・・・そうか。ちなみにそいつは何処に居る？」

「お前は馬鹿か？知ってて言う奴が何処に居る？」

そろそろ終わりにしようか？

僕は夢の樂園にいけるけど君達は地獄にでも行け」

起爆スイッチを上に乗げ叫ぶ。

「待て早まるな」

「少し落ち着きなさい」

そこに居る誰もが叫び、止めに入ろうと走り出す。

起爆スイッチが押されれば、この学校は確実に吹き飛び、多くの命が失われるだろう。吹き飛ぶのは学校だけではなく、周りにある民家、コンビニなどの店、いろんな工場や会社なども消え、その場所はガラクタの山となる。

「神のご加護を今僕に」

起爆スイッチの掛けている指に力を入れる。

誰もがこの瞬間に目を瞑り、死という見えない敵に吞まれ、痛みながら死んで逝く事を想像し、恐怖に浸るだろう。死ぬことを知らないものは、いつもと変わらない日常を過ごし、もう明日が来ないことを知らずに死んで逝く。

もし、神という存在が居るのならば、誰もが祈りを捧げるだろう。

『まだ死にたくない。何でもするから助けて欲しい』と。

死を覚悟し、その時が来るのを待つ。だが、その時は一向に来ない。

目を開き、前を見る。

その光景は絶望から希望に変わった。

空中に舞っているのは、窓ガラスでもコンクリートの瓦礫や植物でもなければ人でもなかった。それは、真つ赤に染まる液体だった。

「・・・これは・・・どういう事？」

今、自分が見ている光景が信じられなかった。

大量の爆弾で跡形も無く吹き飛んだはずの学校が、痛みも無く死んで逝くはずの自分がそこには存在した。

「・・・ガッ・・・ウッ」

ドンッ

爆弾の起爆スイッチを握ったまま、赤く染まる血と共に青年が地面に倒れた。

「勝手な事やってんじゃねーよ」

青年の後ろには20センチはある針をペン回しのように指先だけで回している少年がいた。

「・・・君はいつたい？」

黒田は爆発を防ぎ、爆弾を纏った青年を倒した少年に尋ねる。

その答えは少年からではなく楓太が答えた。

「智久！今まで、どこに行ってたんだ？」

「仕方ねーだろ。あのクソ爺共にの所に呼ばれた後に来てみれば、

何かしら騒がしかったんだから」

「それでも連絡ぐらいしろよ。なあ蒼空？」

「そういう事なら心配して損したぞ。それで、何でクソ爺に呼ばれたんだ」

「それなんだが・・・後で話すよ。それよりこいつは誰だ？」

自分で倒した青年をほったらかして、話していた智久はやつと青年の事について聞いた。

「そいつは、この学校の生徒に化けて侵入してきた馬鹿だ」

「そうか・・・なら、倒しても良かったんだな？と言っても、気絶しているだけだけだな」

楓太は、自分がどんな奴を倒したかも分からず呑気に話していた。これが、侵入者だったから良かったものの、これが生徒だったら問題になっていただろう。サバイバルを通り越しているといわれて。

「もうひとついいか？」

「少しは自分で考えろよ。何だ？」

「そこのお嬢さんは誰だ？」

智久は最初から居なかったから黒田が誰なのかは知らない。

智久ぐらいなら知ってると思っていた。

「この人はここの生徒会長だ」

「そうか」

腰を抜かして座り込んでいる黒田の下へ歩み寄り、手を差し伸べる。

「どうも初めまして白光高等学校二年城田智久といいます。よろしく」

「あっありがとう」

「いえ」

智久の手を取り立ち上がる。

「私は、生徒会長黒田美咲です。こちらこそよろしく」

智久は自分の好感度が上がったと思い込んで仮想世界に入り込んでいる。

「かつこつけてんじゃねーよ」

仮想世界から蒼空の蹴りにより、現実世界に引き戻された。

「何してんだ」

「黙れ」

智久と蒼空によるどうでもいい争いが始まった。

それを流すかのように黒田が尋ねる。

「これからどうする？ 私は、一旦職員室に行って事情を説明してくるけど」

「それなら俺達は警察の事情聴取でも受けてます」

蒼空と言いつてた智久が誰も知らないことを言う。

「智久君それはどういう事？」

「ここに来る前に警察がここに来ていたので」

「そう。わかったわ」

黒田は光を体に纏い、職員室に光の速さで向かった。

「智久！ クソ爺共になんで呼ばれたんだ？」

「何でもある組織が動き出したから少し調べろだって」

「そうか。そのくらい自分でも調べろってんだ」

「まあ仕方ないけどな。それより、何で百合は倒れているんだ？」

「気づくの遅ーよ。」

簡単に言うとな能力の使いすぎなんだ」

「能力で思い出した！ 聞いてくれよ智久」

突然、楓太が何かを思い出しように元気になる。

智久は何のことが分からずに戸惑う。

「おい何だ？ いきなり」

「今日、蒼空が能力を使っただけ」

「本当か？」

「ああ。この目でしっかり見たんだ」

二人の視線は蒼空に向けられた。

その目は子供のように初めて見る物に好奇心を抱いているのと同じだった。

その後は、智久にどんな風に使ったのか、何で使ったのかをしつこく聞かれた。楓太に至ってはある事無いことを自慢しながら話していた。

少しして警察がやって来て、青年の事や経緯まで聞かれた。二時間ぐらいは変えることが出来なかった。もちろん、白光高等学校の二年生は全員である。ブーイングの嵐だった。

智久は警察だけではなく先生にもいろいろと聞かれていた。

事情聴取も終わり、ホテルに向かっていた。

「そういえば、黒田美咲って言う名前どこかで聞いた事あるな」

「お前まだ気づいてないのか？」

「なんだ？知ってるなら教えてくれよ」

「閃光の操縦者フラッシュパイロットって言えば分かるだろう」

「そうだ！何で忘れていたんだ」

「お前同じ超越者なら覚えとけよ。馬鹿だな」

「馬鹿だな」

智久は、ホテルに着くまで屍のようになっていた。もちろん、蒼空と楓太がずっといじっていたからである。

次の日に行くことになっていた研究所は延期になった。なんでも酸を操る青年にやられたのが両校合わせて100人を超えたとかで（百合を含めた）。

でも、そのお陰で次の日は自由行動になった。

この出来事がニュースであり扱われていなかった事に疑問が湧いたがすぐに情報操作がされた事に気づき、気にしていなかった。

だが、ただの侵入者程度で情報操作されるとは思わない。政府は何かを裏で隠していることには気づかなかった。

国際能力専門学校の近くにあるビルの屋上から学校を見下ろす二人組みがいた。

「さすがにNo.9じゃ閃光の操縦者には勝てなかったようだね」
まだ、幼さが起こる少女は、身長190センチはある男に話しかける。

「まあ仕方ないさ。そこまでは期待してないかな」

「今日は運が悪いね。まさか、地獄の追尾トラッキングヘルがいるなんて分からないよ」

「そうだな。それでも来た甲斐はあった」

男はポケットから一枚の写真を取り出した。

その写真には、友達と笑い、楽しい生活を送っている少年の姿があった。

「やっと見つけたぞ五十嵐蒼空。まさか生きていたとはな」

「これで、計画もまた一歩進んだね」

「報告します。No.9は監獄のLevel.4に収監されるようです。どうなさいますか？」

黒いローブに身を包んで偵察をしてきた青年が現れた。

「気にするな」

「それと帰還命令が出ています」

「そうか」

黒いローブに身を包んでいた青年の腕に掴まり、その場は後にした。

選抜

国際能力専門学校の侵入者騒ぎから三週間が過ぎようとしていた。ニユースであまり扱われなかった事もあり、すぐに落ち着きを取り戻して来た。それでも、四日ぐらいは警察の事情聴取やマスコミの取材などで忙しかった。その間、学校は臨時休校になった。事情聴取や取材以外でも、怪我をして入院した者がいたからでもある。

「何でこんなに騒がしいだ」

窓側の席に座って昼食を食べる蒼空が呟く。

「お前知らないのか？もうすぐ、あれの時期だぞ」

「あれってあれの事か？」

蒼空の向かいに座る楓太が「あれ」曖昧な表現で答える。

「あれって能力競技大会の事？」

野菜ジュースとパンを食べながら百合は尋ねる。

百合は、国際能力専門学校の侵入者による襲撃をつけた結果、倒れて病院に搬送された。怪我もあまりしてなく何折、能力の使いすぎで倒れたため三日で退院できた。これは、入院している中で早いほうだ。遅い者は一ヶ月なんて奴もいた。

「そう。毎年恒例のビッグイベント」

「もうそんな時期になったんだ」

「でも、なんでこんなに騒がしいんだ？大会までは一ヶ月以上は間があるはずだろ？」

能力競技大会は毎年、七月中旬から八月の二日まで行われる。この大会は、北海道、東北、関東、中部、近畿、中国、四国、九州地方から各三校の代表が集まり、能力の使い方、威力、性能などを競う。毎年、予選を行い代表を決めている。いつもなら、予選を行っている時期だが国際能力専門学校の侵入者事件があり今年は遅れている。

「あの事件のせいで出場するはずだった選手が入院したりして生徒

会はいろいろと大変らしいぞ」

「そうか。まあ俺には関係のない話だけだな」

「本当に言つてのか？」

「何がだよ？」

「本当は出てみたいくせに」

「当たり前だろ出てみたいさ。あんな大舞台に出れば俺の将来だつて約束されるはずだ」

能力競技大会は、全国規模で行われるため観客動員数が一試合あたり十万人を超える。その中には、軍や研究所、世界有数の会社の幹部なんかも観に来る。そこで目に止まれば、スカウトされたりして将来が約束される。力ある者にとっては大事なイベントだが、無能力者や力の弱い者にとってはどうでもいいイベントになる。

「なら頑張れよ」

「そうだよ。蒼空だつて頑張れば出場できるよ」

「百合、本気で言つてたら俺には皮肉にしか聞こえないぞ」

「なんでよ？」

「お前ら二人はいいさ。力があつて出場できるかも知れないけど、俺がどんなに足掻いてもあんな晴れ舞台には一生掛かっても出れないぞ」

無能力は、どんなに足掻いた所で能力が発現するわけではない。能力には、いくつか発現方法が存在する。生まれたときから既に力を有している者や普通に生きてきて自然的に力を使えるようになる者がほとんどとされている。一般的にはどちらかと言うと後者の方が断然に多い。生まれたときから持っている者は、力の使い方が自然と出来ていることから天才と呼ばれる分類に多い。無能力者は能力が自然に発現するのを待たなければならない。

だが、能力を強制的に発現する方法がある。それは電磁波や電気ショック、薬の投入などにより無理やり且つ強制的に発現させ方法がある。この方法は、国際条約により禁止されている。電磁波や電気ショック、薬の投入などは、体に大きな負担となり死に至ること

がある。また、能力の暴走も高い確立で起こるとされている。
今挙げた三つが一般に知られている発現方法になる。

ただ、稀に命の危険にさらされた時に発現することがある。これにより発現した者は普通に発現するよりも基本レベルが遥かに高い。また、希少価値の能力を持っていると言われている。

「そんなに落ち込むなって」

「そうよ。元氣だしなよ」

二人は笑いながら励ましているため逆効果になっている。

『生徒会からのお知らせです。』

今から名前を挙げる生徒は至急、会議室に来てください』

突如、学校中の放送が鳴り響く。

「なんだ？」

「生徒会でも放送使うんだ」

生徒会を馬鹿にするように蒼空は言う。

「お前、どんだけ馬鹿にしてんだよ。生徒会でも放送ぐらい使うだろ」

「楓太の言い方も少し馬鹿にしてるよ」

蒼空を馬鹿にしようとした楓太は逆に百合からつつこまれてしまった。

『二年一組、絹江誠、きぬえまこと佐伯理紗、さえきりさ西島香奈、にしじまかな二組、井上隆明、いのうえたかあき三組、あきさめふうた秋雨楓太、まつしまゆり松島百合、いりかわりゆうすけ入河龍輔、かなだあきちし四組、金田明俊以上、八人はすぐに会議室に集まってください』

呼ばれた生徒は全て二年生だった。三年や一年の誰一人として含まれない。

「楓太と百合呼ばれてるぞ」

「何で俺なんだ？」

「私何もしてないよ」

「何かしたから呼ばれてるんだろ。何したんだよ？」

「何もやってないよ」

「人を疑うなよ」

二人共自分が何をしたのか心当りが無いらしい。

考えればこの間、事件に巻き込まれて百合は入院、楓太は何も無かったものの事件の後に問題を起こすほど馬鹿ではない。
なら何故よばれた。

「そうか。・・・やっぱり」

「蒼空分かったのか？」

「教えてよ」

蒼空は百合と楓太が何故先生ではなく生徒会に呼ばれたのかが分かった。

「行ってみれば分かるよ」

「いいから教えろ」

「早く行けつて。遅刻すると起こられるぞ」

そう言う二人は教室から出て行った。

ここの生徒会長は毎年、起こると怖いと言う噂が流れている（今年はどうかは知らない）。だから二人はすぐに出て行った。

「二人共行った？」

「行ったぞ。遅かったな」

二人とすれ違うように智久が教室に戻ってきた。

智久は昼食を買いに近くのコンビニに行っていた。ちなみにこの学校では、一度学校に入ると終礼が終わるまで出ることは出来ない。智久は裏口からこっそりと出たのだ。

「先生に見つかりそうになったからな。はいよ」

「おっサンキュー」

ビニール袋からカフェオレを取り出し、蒼空に渡した。

カフェオレは蒼空の好きな飲み物になる。

「さっきの放送は何だったんだ？」

「あれは多分、能力競技大会の選手かなんかだろ」

「そうか。確か二年だけだったな決まってるのは。まあ俺達には関係ないことだが」

「そう」

智久は実力があるにも関わらず、自分には関係ないといった。まだ、選ばれる可能性があるというのに。その力は、危険リンクSに指定されるほどの実力になる。比べるなら閃光操縦者フラッシュパイロットと同等の力を持つている。

それなのに選ばれないという自信があった。

それから、二人が戻ってきたのは五時限目が始まって数分してからだった。

二人（（龍輔を含めて三人））の手には服が入った袋を握っていた。多分、能力競技大会で使うユニホームが入っていることは聞かなくても分かった。

今日の授業は五時限で終わり終礼も職員会議でなくなった。

「蒼空、聞かないんだな？」

「何の事だよ」

「昼休みの放送の事だよ」

楓太は昼休みに生徒会に呼び出された事について、蒼空が聞いて来なかったことを不思議に感じたため恥を惜しんで聞いた。

「それか？どうせ能力競技大会の事だろ」

「当たり前のように答える蒼空に驚いた。」

「知ってたのかよ。何時から気づいてたんだ？」

「呼ばれた直後ぐらいかな」

「なんだよ。その時から知ってたんなら教えてくれよ」

「そうよ」

突如、横から百合も入って来た。

「知らないほうが面白いだろ」

笑いながら二人をからかう。

「酷ーい」

「趣味悪いぞ」

蒼空には、二人から批判の雨が降り注いだ。

途中から批判が関係ないことまでところまで来て終いには成績の事まで引っ張ってきた。もうこの二人には能力競技大会の事はどう

でも良くなっていた。

「百合と楓太！」

ドアの近くに居た智久が声を掛ける。

「何？」

蒼空への批判をやめて百合が答える。

「先輩達が呼んでるぞ」

智久の隣には男女の先輩が立っていた。

どちらも生徒会メンバーだ。

「君達何をしているのかな？」

生徒会書記、三年、九条陽菜。くじょうはるな

眼鏡を掛け髪は肩より少し長いぐらいで女性と言ったいいだろう。

「五時限目が終わったら会議室に來いと言ったろ」

そして、生徒会副会長、二年、長谷川蓮。はせがわれん

短髪で身長は高く馴染みやすそうな感じをしている。

「・・・それは・・・」

なんと言い訳をしようかと言葉に詰まる百合に対して、楓太はすっかり忘れていたと口を開けて思考が停止していた。

「まあいい。早く行くぞ」

以外にも怒りはせず、冷静に帰る準備をさせた。

その言葉に百合と楓太はホットした。楓太は笑みさえも浮かべた。

「はい」

「すいません」

すぐに準備して先輩の下に言った。

「今から会議があるから先に帰ってて」

「じゃな」

そう言い残し教室を出て行った。

廊下から九条陽菜の声が聞こえてきた。

彼女は少し怒っていたのだろう。かなりでかい声で注意しているのが声が聞こえてきた。

四人が出て行った教室には五、六人にしか残っていなかった。

「帰るか」

「そうだな」

机の引き出しから宿題を取り出し、手に持っている鞆に入れた。

二階の階段を降り、靴箱で智久が話しかけてきた。

「蒼空、最近何も変わったことないよな」

「なんだ？急に。何も変わったことはないが……何かあったのか？」

「いやなんでもないんだが。近頃、何かと不穏な動きがあるから気をつける」

「なんだそれ！まあ気をつけるよ」

その後もいろんな事を話しながら帰っていた。

話は学校生活から政治やスポーツ、漫画、ゲームなど幅が広くジャンルが定まっていなかった。

その中でも長く話していたのが漫画である。

漫画の話になると智久も蒼空も暑くなって語ってしまう。そのくらい好きで、家には漫画の単行本だけで千冊ぐらいはだろう。

そんな事していると家の近くまで来ていた。

「じゃまた明日」

「じゃな」

智久と別れ、マンションについているエレベータを使って五階まで登る。

五階に駆け上がるのに十秒も掛からなかった。

部屋の前まで来るとポストに何か入っているのに気づいた。

招待状

ポストから封筒らしきものを取り出し部屋に上がる。

蒼空は一人で暮らしている。親は一度もこの家には来たことが無く、蒼空は親に会いたくも顔を会わせる事も嫌っている。

何故嫌がっているかはまたの機会にでも話をしよう。

鞆を壁際に投げ封筒を片手にソファーに座る。

「何だこれは？今まで学校の成績以外で封筒なんて届いた事無いぞ」学校の成績は、生徒には学校で紙切れに自分の成績を書かれて手渡しで渡し、親には封筒に入れて郵送で送られる。

このシステムは最近になってからは珍しい。

パソコンの普及率が百パーセントを越えた今そんなお金と時間が掛かる方法を取っている学校は多くない。寧ろ少ないほうだ。

今やほとんどの学校が電子メールで各家のパソコンに送るのが一般的になっている。

「中身を見れば分かるか」

封筒の口を剥がそうとしたが中々剥がれず表面だけが剥がれてしまい、薄い紙の残りで封筒の口がまだ塞がれていた。

蒼空はこういう細かい事はあまり得意ではなく、逆に不得意なほうになる。

「おれやっぱり不器用だな」

その後、何度も挑戦したが結果的に開けることが出来ず、諦めてしまった。

封筒をそこらへんに投げ捨てて、夕飯の支度をするために財布を持って家をでた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9702v/>

運命が変わるまであらい続けろ

2011年11月27日16時52分発行